

# 教育について学ぶ

## —その3—

山本哲朗

### 要旨

最近、わが国の児童や生徒の学力が国際的にみてかなり低下していることが問題となっている。その原因の一つとして「ゆとり教育」が問い正され、授業内容の見直し等が進められている。著者は前論文<sup>1), 2)</sup>において教育に関する総数41冊の著書・雑誌から大学教育に希求される手法あるいは大学教育の問題点を記述した。本論文では、その後に読んだ教育に関する20冊の著書から2編の前論文と同様に特に教育方法に有益である箇所を引用して、大学教育を教員および学生の立場から考え、より良い大学教育を実現する手法について述べている。

### キーワード

教育, 授業, 教員, 学生, 教育能力, 学ぶ意欲

#### 1 まえがき

著者は前論文<sup>1), 2)</sup>でそれぞれ22冊, 19冊の教育に関する著書および雑誌を取り上げた。執筆者は教育者, 作家等多岐にわたるが, 大学教育を実施する上で有用な点が多々あった。前論文1)では、むすびとして次の2点を主張した。教育の原点は学生諸君が自ら積極的に学習する姿勢にある。学生諸君が理解できないことは積極的に教員室に質問に行くことが当たり前となる教員・学生の学習緊密度が高くなること教育を推進することが大切である。<sup>3)</sup>

前論文<sup>2)</sup>では、むすびとして次の期待を記述した。少子化による大学全入時代に入っても、大学教育レベルを下げないという意識を大学当局はもちろん教職員は持ち続けなければならない。<sup>4)</sup>

本論文でも引き続き大学教育を充実したものにすることを標榜して、その後に読んだ教育に関する書籍20冊から大学教育にとって有益な意見や考え方を汲み取ることにした。その箇所には『』をつけた。なお、著者の敬称は省略した。

#### 2 教育への問い 現代教育学入門<sup>5)</sup>

本著は編著者である天野郁夫他8名が各章を執筆しており、初版は1997年に発行されている。第4章能力の見え方・見られ方では日本とアメリカの教育での生徒の能力についての考え方と伸ばし方に大いに差異があり、大学教育にも参考になると思い、少し長く引用しよう。

『1 成績と能力 「教室のピグマリオン」一九六四年, アメリカ, ボストン。ハーバード大学の学者たちが、ある「実験」を行った。教育心理学を専門とする研究者たちが、小学校を訪れ、教師たちに「ハーバード習得力判別テスト」について説明した。「このテストは、どの子どもの学力が伸びるかを正確に判定するために、新しく開発されたテストです」と。そして、テストを実施し、その結果をもとに、どの子どもの学力が伸びる可能性があるのかを教師たちに知らせた。教師たちに手渡されたリストには、全生徒のおよそ二〇パーセントが、「これから伸びる生徒」として名前をあげられていた。一年後、再び研究者たちが学

校を訪問する。そして一年前のテストの結果と実際の成績の伸びとを照らし合わせてみた。すると、テストが予測したとおりの結果が得られていた。これから成績が伸びるといわれた生徒は、それ以外の子どもに比べて、算数でも、国語でも、さらには知能テストでも、大きな伸びを示したのである。たしかに、「ハーバード習得力判別テスト」の正確さが証明されたかに見えた。ここで話が終わってしまえば、単なる知能テストの開発の話にすぎなくなる。しかし、研究者たちの「実験」の本当のねらいは、このテストの優秀さを証明することではなかった。というよりも、実は、この実験にはあるトリックがしくまれているのである。成績が伸びるだろうと指摘された子どもたちは、テストの結果選ばれたのではなかった。ランダムに、つまり、デタラメに選ばれていたのである。・・・「このリストに名前をあげた子どもたちには、今よりも成績が伸びるだけの能力がある」。そう指摘された教師たちは、これらの子どもたちにより多くの期待をいただろう。ほかの子だったら、先生に指され、答に一度失敗したらつぎの生徒に回されてしまうところを、能力があると指摘された子どもたちには、何度もチャンスが与えられたのかもしれない。こうして「成績が上がるだけの能力があるはずだ」という思い込みが、教師と生徒とのやりとりに反映し、その結果が実際の成績の上昇に結びついた。・・・教育心理学や教育社会学の分野で有名なこの研究は、「ピグマリオン効果」の実験と呼ばれている。・・・<sup>6)</sup>』4 日本の学校を考える『能力と努力 日本の学校では、能力があるかどうかではなく、どれだけがんばって勉強したかのほうが重視される。どの子どもも能力の点では大きな違いはないはずだという見方が基礎にあり、そのうえで成績の差は努力の違いによると見る。・・・したがって、このような日本の学校では、「この子の成績は伸びるだろう」という情報が与えられたとし

ても、教師は特定の生徒だけに期待をかけることに慎重になるであろう。<sup>7)</sup>』筆者はこの原因は教育における平等主義が根付いているのが大きな原因と考える。しかし、能力のある生徒は伸ばせる制度を設けることは理にかなっており、山口大学における飛び級や博士短縮取得制度は能力のある学生をエンカレッジする点から非常によいものだ。

著者は教養の教科であった物理の定期試験時に京都大から山口大学に赴任された若い物理の先生から、試験の際に「よくできているね」と言われ、高校時代に不得手であった物理が好きになった思い出がある。教員の一言が生徒の能力を引き出し、さらには勉学に勤しむ機会があることをわれわれ教員は忘れてはならない。

### 3 大学の教育力—何を教え、まなぶか<sup>8)</sup>

第4章大学の転換期 大学に求められる人材育成において、『近代社会の急速な発展はその蓄積された知識の量と加速度的に増大させ、さらに新しく展開される学術の先端も飛躍的に広がっている。とくに自然科学の分野においては、大学入学の時点から先端の学術的探求の段階に達するまでの距離は飛躍的に増加した。いいかえれば学生は、知識の先端に参加するよるこびに接する前に基礎的な訓練を長く続けなければならない。また同時に、先端分野は大きく広がっているわけだから、最終的に自分が受けている訓練がどのような学術的意味をもつかも自明ではない。前述したフンボルト理念に代表される、探求による学習の動機づけが、機能しにくくなっているのである。・・・これに対していま始まろうとする社会では、専門化・細分化された知識が直線的に発展するだけではない。様々な専門分野の知識が組み合わせられて新しい知的地平が拓け、新しい市場が創られ、経済活動が始まる。しかもそうした知識は恒常的に発展し、更新され続けていく。大学の卒業生は専門化

された職業の知識をあらかじめ蓄積し、それを職業で使っていただくだけではない。常に新しい知識を身につけていくことが要求される。<sup>9)</sup>』大学教育では、細分化された専門教育の前に基礎的な共通教育が実施されているのは周知のとおりである。大学生にとって、いろいろな新規な専門教育を履修することに奔走しているように思える。筆者の考えはそれら専門教育を単一的にとられるのではなくて連関して勉強することにより、社会が要求している知識が包括的に取得できるように指導している。しかし学生には、この趣意がなかなか届かないのが現状である。

少子化がもたらした「大学全入」では『…高等教育は特定の人たちに与えられた特権ではなく、誰でも必要であれば受けることのできるものとなる。アメリカの高等教育研究者のM・トロウは、こうした高等教育の発展段階をユニバーサル化の段階といている（喜多村1986）。その意図せざる結果は、大学の進学バリアが低くなることによって、高校以下の学校においても一定の学力を達成させる重要なインセンティブが喪失されることになる。…ユニバーサル化は大学教育がおかれたコンテキストを大きく変化させる。もっとも直接的には大学進学への学力上の制限が実質的になくなる。いわゆる「大学全入」の時代に入った。これは大学に入学したことが一定の学力を証明する機能をもたなくなったことを意味する。大学がなんらかの付加価値をつけることが要求されるのである。…最近の調査によれば、高校生のほぼ半分はほとんど家庭で勉強しておらず、大学進学者のみをとっても、ほとんど勉強していなかった学生は三割近くに達した。結果としての学力よりも、それにいたる勉強の習慣を獲得していない学生が入学することになる。…いずれにしても、高等教育が社会的あるいは個人的な投資として、十分な意味をもつものか否かが厳しく問われるのは当然といえよう。それを

社会に説明する責任を大学は負わなければならない。<sup>10)</sup>』筆者は大学に勤務して35年になろうとするが、今の大学生への授業の進捗の程度は十年くらい前の3割～5割である。その原因の一つは授業の内容を学生が理解するように分かりやすくすることが希求されている。他はここで著者が行っているように、高校時に学生の勉強が足りなく、勉強の本来の意味が習得できていないことにあると指摘したい。初等教育から勉強は学校だけではなく、自宅で予習や復習する習慣を身につけねばならない<sup>11)</sup>。自宅では勉強せずに塾に通っている生徒が多いことの現状を見るにつけ、受身的すなわち教えてもらうことで勉強していると錯覚に陥っている生徒がいかにか多いことか。このような教育を受け、大学全入時代では生徒の勉強意識を変革するのはわれわれ教員の使命である。

4 大学教育の課題 目的、過程、メカニズムでは『このように考えてみれば、これまでの大学のあり方が再検討をせまられざるを得ないのは明らかだろう。まず第一に大学教育の目的がいまいちど問い直されなければならない。前述のような産業構造の転換の中で、従来の職業とそこに要求される知識技能は変質している。他方で学術的な知識を押しつけることによって、暗黙のうちに職業能力が形成されるという説明は社会に説得性を持たなくなっている。積極的に大学教育が知識能力を形成すること、またそれを明示的に示すことが求められる。第二に、学習の目標と、教育のプロセスを再検討することが求められる。大学に入学する学生の教科的な知識だけでなく、その生涯に対する選択、経験などの点で大きな変化が起こっている。また知識の爆発的な拡大の中、学生の知的興味を引き出すことが難しくなっている。こうした新しい条件と前述の目的とをいかに結びつけるのが問われる。第三に、そうした変化を大学の中で恒常的に生じさせるメカニズムをどのように

形成していくかが再び問われざるを得ないのである。これらの三点を以下の三つの章で考えてみたい。<sup>12)</sup>』ここでは紙面の関係上、三つの章と節の題目だけを以下に列挙する。第5章職業能力・コンピテンス・教養1 大学教育と職業一二つのモデル、2 コンピテンスと大学教育、3 教養教育の再発見、第6章教育力をつくるもの1 インパクトの基盤、2 教育力強化の戦略、3 教育改革のメニュー、第7章教育力の基盤1 教育組織のガバナンス、2 モニタリングと改善拠点、3 財政的基盤、4 質的改善のための社会的メカニズム、社会全体の投資としての高等教育 結論の中で大学が社会と開かれた対話を通じて自立的に自らを変革することが求められると述べているが、筆者も現在の大学教育では学生諸君が社会人となる際の目的や目標を持たせる教育が欠落している気がしてならない。と同時に、前述したように、学生自身が学ぶという強い意識を持たねばならず、われわれ教員はその対応を求められている。

#### 4 日本の教育は間違えたか<sup>13)</sup>

著者は『冥府山水図』が文壇デビューとなった作家、三浦珠門である。本書は次の4部から構成されている。第1部近代日本の教育体系制の確立、第2部明治の教育の理想と現実、第3部戦後教育の問題点、第4部希望の未来に向かって。第4部第12章は『学校制度をどう変えるべきかについての私の提案』の中で、小学校二年までは生れ月による成長の度合いを配慮せよ、四年生の落ちこぼれには補修を。自治体で全員のテストを、中学では英才を伸ばすために専門家による特別授業を！について論じた後、大学教育に関連して卒業見込みで就職試験を受ける資格を認めるな、という斬新な考え方に触れてみたい。『大学に関しては、専門的な能力をつけるには、今の四年制の学部プラス二年の時間が必要であろう。四年では一般的な教養に専門科目の

基礎を学ぶのが精一杯である。近年、計画されている法科大学院というのも、そういう事態に対処しようとするのであろうし、従来の司法試験に合格した者を、司法修習生として二年の教育を行ったのも、同じ精神に即したものであろう。公認会計士についても同じことがいえる。・・・四年制の大学学部では教養に若干の専門知識、技術を加えるとするなら、いっそ学部卒業生を、アメリカと同じ文学士と理学士に分けてもよい。文学士経済学専攻、理学士機械工学専攻、という形にする。数学もやって、統計学を学び、理系にも文系にも適性を持っている人なら、文理学士統計学専攻という称号もよい。・・・ただ社会のさまざまな人の需要に応じ得るだけの柔軟性を、教育機関が備えておくべきである。たとえば町工場に入って、特殊な製品を作ろうとしている若者が、アカデミックな知識や技術を必要とした場合、大学は彼らの期待に応えられる姿勢を持っているべきであろう。・・・今の学校教育制度は硬直化しているし、いささか偽善的になっている。今の大学制度がスタートした時は、進んだアメリカと同じだから旧制の大学に劣らないといった言説を見聞した。しかし今日のように四割近い若者が大学に進学する事態を予想していなかった。それが今の大学の動脈硬化の原因ではないだろうか。・・・入学当初は何となく浮かれて、大人になったつもりで大人の遊びや時間の過ごし方をしていて、小遣いが足りないのでバイトに精を出す。三年にもなると就職が心配で教室に出てみるが、授業は半分判らなくなっている。仕方がないから、学年の後半は就職用の講習会や手引き書で就職用の勉強をする。四年になって春から初夏にかけて就職が決まれば、もう勉強などはしない。また、秋になっても就職が決まらない学生は職探しに奔走して、これまた勉強どころではない。その解決策としては、卒業見込み者に就職試験を受ける資格を与えないことであろう。官庁・企業

は大学卒業生のみを対象に、募集を行えばよいのである。新卒業生を主たる対象に、四月から六月ころまでに就職試験を行って、採用と決まった者を夏の間に研修させて、九月から見習い半年、そして大学卒業後一年で本採用という形にすればよい。そうすれば試験に少しでも有利にしようとして、大学生は今まで以上に勉強する結果になろう。・・・とにかく戦後の教育制度もすでに半世紀を過ぎた。そして、それがあまり成功したとはいえないのが、万人の認めるところであるなら、このあたりで学校及び生徒及び学習の観点からも、全面的な見直しを行う時がきているのではないだろうか。<sup>14)</sup>』

本書は二〇〇四年に発行されているので、上述した三浦の指摘とは反対に、団塊の世代の大量退職により、企業の求人は1年前の年度終わりから開始されて、学生が就職試験に翻弄されている感は否めない。ただ、教育者でない三浦は大学生の勉強意欲の低下を指摘しており、当を得ている。われわれは遊び資金欲しさのためのアルバイトを禁じさせ、本来の知識・技術に精を出すように学生を指導せねば、大学生の学力低下に歯止めがかからないといいたい。

## 5 大学生が変わる<sup>15)</sup>

あとがきに記述されているように、本書は「学生の声を聴く」という姿勢で考えたことがまとめられている。『大学教育の研究に当たっても、「学生が何を学んだか」を明らかにすることが教育研究の真髄であると考え。それがわからなければ授業や教育の分析・研究はそのスタート地点にさえ立っていないということになるのではないか。教員の話（問題提起、研究課題など）に対して学生たちが「何を考えたのか」「どんな質問・発言・討論をしたか」「授業外でどんな学びを自主的におこなったか」などを考察することが教育研究の本丸であって、上手な講義をすることで終わっ

ていたら「教育も学生も見えていない」ことになる。教育研究においても一つ重要な点は、上記の「学生が何を学んだか」に関連するが、授業のテーマを学生が自分の問題として受け止めることができたか否かである。<sup>16)</sup>』われわれ教員は授業目標を定め、シラバスに則って教育しているが、本書ではそれだけでは不十分であることを教えられる。すなわち、学生が何を学んだかを授業評価などにより明らかにして、学生に学ぶ意欲を持たせることや質問、議論の大切さを教授させねばならない。

前述したあとがきに大いに関連する第七章自我と教養と主権者への自己形成をめざしての第1節大学の授業から学生が体得する学び方・学ぶ力において著者は次のように言っている。『筆者の担当する「日本国憲法」（中京女子大学健康科学部・健康スポーツ科学生一年生、一三〇人）と「教育行政論」（同大学人文学部・児童学科二年生、八〇人）の教室の学生たちに、「学生が展望する自己形成と学びの目標」（第二章2節）の観点からみて、その実際の授業に参加することをとおしてどんな学び方や学ぶ力がついたかを小レポートで考えてもらった（二〇〇四年度）。その代表的な自己省察は以下のものであった。①あたえられた知識を鵜呑みにし、信じ込んではいけない。「自分で調べ研究して、自分で一から考えること」が大切だということを学んだ。②政府の政策や行政に対して「怒り」さえ感じた。・・・③自分が思っていたよりも日本の社会はずっと暗いと感じた。・・・④教育をする側という「当事者の立場」にたって教育問題や子どもの問題を考えきれていない自分、そこからまだまだ逃げている自分であると思いました。⑤もっと勉強して、「世の中に反論する、あるいは共鳴・共感する」というように、社会や時代とともに生きていくと感ぜられる力をつけたいと思った。⑥人権や権利が侵害されていく時代社会のなかで、「無知の恐ろし

さ」を知り、正しい知識や考え方をもつことの大切さがわかった。・・・<sup>17)</sup>』筆者には専門科目が相違するが、新村教授の授業の仕方でも模範的なレポートと解釈するが、学生が何を学んだかがよく理解できる。

## 6 教えるということ<sup>18)</sup>

初等教育を対象にした書籍ではあるが、教えるというテーマは大学教育でも絶えず議論されている観点から、本書から引用することにした。教師は授業の専門家たれ一実質そなえぬ教員養成教育—において次のように指摘している。『教師は、その仕事の本質からいえば、医師以上に高度に、専門的な仕事に対して、責任をもたされている。子どもがもっている可能性にとりくんで、これを引き出すという仕事は、病気をなおすよりも、はるかに複雑で困難な仕事である。

学校教育の核心は、授業である。したがって、教師は、一人一人が授業の専門家でなければならない。ところが、すこし立ち入って学校教育の実態にふれて見ると、いわゆるベテラン教師はいても、専門家はいないというのがいつわらざる実情である。だが、これは極めて当然の事態で、だいいち、大学における教員養成教育は、ほとんどその実質をそなえていない（この事にたいしては、教育学者の怠慢が声を大にして攻められるべきであろう）。そのうえ、致命的なのは、教師の専門家としての訓練は、現場に出てからでなければ与えられない性質のものであるのに、学校という現場は、若い教師を授業の専門家として訓練し、育てる「場」では、およそないのである。これは、とりも直さずいま学校では、専門家としての訓練を受けない教師の手で教育が担われているということを意味している。<sup>19)</sup>』

教育学部で専門教育を受けた者以外は大学における授業の方法を教授されているわけではなく、自分の専門とする研究分野の基礎

的・応用的な研究をベースにして授業を行っている。したがって、模範的な授業はいかなるものかを判断することは難しい。しかし、最近では学生による『授業評価』や『教員の授業参観』をとおして、授業実施法が良い方向に向かっていることは事実であり、学生に真の教育をすることを、教員は大学の使命として意識せねばならない。

さらに著者は公開研究会にのぞむこと一宮城教育大学附属小学校・養護学校公開研究会に寄せて一について、こう述べている。『私は、学校教育の根底であり、また魂であるものは、授業だと考えています。授業がほんとうに大切だと考えています。授業がほんとうに大切にされていない学校は、外形がどんなに整っていても、魂を失ったものです。授業の研究は、特に小学校の教育の中で、戦前から盛んに行われていて、その歴史は古いわけですが、戦前の学校教育では、教師の仕事は基本的には、「教科書を教える」ことであり、したがって授業研究といっても、授業のテクニックの研究に傾いて、真の教材研究を欠いていた恨みがあります。授業を充実したものにするためには、教材研究が学問的根底をもつ必要があります。戦後にいたっては、教員は大学において養成するという方針が確立されましたが、それは、教師の仕事がきびしい学問的訓練を必要とする仕事であることが認識された結果です。大学が教員養成の任務を引き受けるということは、いわば既製品の教員を社会に供給する仕事を大学が引き受けることではありません。私は、授業の専門家としての教師は、現場の教育実践の中で次第に自分をつくり上げるほかないと考えています。大学にできることは、その基礎となるものを与え、さらにできれば、卒業後の教師の自己形成にたいしても協力することなのです。教師の自己形成にとって、決定的に重要なのは、その属する職場が教育の実践と研究の場であることです。大学と附属学校と、そして広く地域

社会とが、一体となって教育実践の質を高める課題にとりくむため、公開研究会が役立つことを期待してやみません。<sup>20)</sup>』このことは市川太一の文献<sup>21)</sup>で指摘されていることと内容が符合する。改めて教育は地域社会ぐるみで取り組む必要性を強く感じる。

## 7 授業 人間について<sup>22)</sup>

村井実による冒頭にある本著すすめは授業における児童と本著者大学教授林竹二間の授業には大学教育に相通じるものがあり、紹介しよう。

『教師として子どもたちの前に立つもののとまどいは深い。子どもたちに教えてわからさなければならぬことは、かぎりなく多い。だが、子どもたちは容易に意欲を示さず、教師の苦心はしばしば空回りに終わる。日ごとのいらだちが、やがて教師の子どもへの姿勢に歪みを生じる。それで被害を被るのは、ただちに子どもたちである。こうして、教師と子どもたちとの双方が傷つき、いよいよ授業をつまらないものにしていく。その悪循環がありがちな学校の現実ではないか。この悪循環をなんとか断ち切れないものか—この書物の著者林竹二先生は、教師養成にたずさわる大学の総長として、あるときそう発言されたのではないか。では、どうすればよいのか。まず、学校教育の中心である授業を見直すことである。そのうえで、子どもたちの心を開く教育、そして、学ぶことの喜びをすべての子どもたちに得させる授業が絶対に可能だということを、天下に身をもって示すことである—そう先生は決意されたのである。・・・教師の開いた心があれば、子どもたちの心も響いて開く。これが、林先生が身をもって知ることができた、授業の成立の第一の要件であったようにみえる。第二の要件は、林先生自身、先生の授業についての子どもたちの反応から学んだという、そしてそのことを、「子どもが授業の中に入り込んで、その客体ではな

く、主体（主人公）となる」ことであつたと表現する。

林先生は、こうして、すべての授業は、小学校の授業も、大学で自分がやってきたゼミの指導でも、結局は同じものだという「発見」をした。<sup>23)</sup>』筆者も大学の授業も教員と学生が一つの輪の中で楽しくおこなわれ、学習は楽しくすべきものだと考えている。

著者は授業における教師の役割において次のように言っている。『授業の主体は子どもたちだが、授業をつくることは、教師の仕事である。それは合奏や合唱をつくる仕事に似ている。・・・授業の中でも、子ども一人一人の間の相互の交流が欠けていては、本当の授業は成立しないのだと思う。もっとも、この点になると、私のように一時間だけの授業者には、まったく窺知することさえ許されない、最もむずかしい課題がそこにある。子どもたちは発言しているときと、発言していないときと、同様に深く参加していなければならない。<sup>24)</sup>』私は大学の授業で学生に質問をし、解答させたり、板書させるように心がけているが、指名した学生以外はその質問について考えようとする学生が多いのを嘆かわしく思う。本書の著者が提言しているように、クラスが一体化することが真の授業である。

## 8 学ぶということ<sup>25)</sup>

著書<sup>18), 22)</sup>と同じ著者林竹二による著作である。本書の章立ては次のとおりである。序章学問について—季節外れの考察、第一章教授会の責任は極めて思い、第二章学ぶということ、第三章大学改革。第二章から教授される点を引用しよう。Ⅱ大学という世界では次のように意見している。『第一に申したいことは、大学という世界がいったいどういうところであるか、というその問題です。大学というのは、ひとつの社会をなしておりますけれども、私はむしろ、一つの世界を構成しているといいたいのです。・・・それでは、大学が

そういうふうにして自身一つの社会であり、世界であるというのは、どういう意味を持っているのか、ということをご自分でこし考えてみたいと思うのです。社会というのは共同体 Communityであります、大学という共同体を共同体たらしめているものはなにか。大学という共同体の本質なり魂なりを形づくっているものはなにかといいますと、それは学ぼうとする意志における共同、この場合は教師と学生とが同じように学ぶ意志を持っている、その意志における共同によって結ばれているということ、それが大学という共同体の魂だと私は考えております。・・・それでは、大学をそういう独自の世界にしているものはなにかということ、我々は考えなければなりません。それは実は大学だけにあるとは限りませんが、大学に特に強く要求されているものでなければなりません。それは、学ぶ意志というものにむすびついて真理を真理として、あるいは真実を真実であるが故に、尊重する精神、あるいは真実をなんらかの利益のためということを離れて真理自体のために、真実そのものために追求するという精神、それが大学という世界を他の世界から区別する原理ではないかと考えます。・・・社会が大学に期待するものは、(社会が直接に期待しているのは事実上は別なものかもしれませんが)本質的にはやはり大学が独自の大学としての存在と活動を通して社会の要求にこたえるということではなければなりません。社会の要求をどこまでも主体的に受け止めて、主体的な形でそれに応えること、それが大学の第一の任務なのだ、これをまず私は申しておきたいと思えます。<sup>26)</sup>』

V学ぶということでは、以下のように述べている。『私がかつて、あるところで、こう書いたことがある。学ぶということは、覚えこむこととは全くちがうことだ。学ぶとは、いつでも、何かをはじめることで、終わることのない過程に一步ふみこむことである。一片

の知識が学習の成果であるならば、それは何も学ばないでしまったことではないか。学んだことの証しは、ただ一つで、何かがかかわることである。テスト中心の教育は、本当に学ぼうとする意欲や能力を、ほとんど致命的といってよいくらい傷つけ、駄目にしてしまっている。私は特に大学に入ってきた学生に接して、それをつよく感じる。大学の入学試験に合格するために、彼等は、そのための準備をする過程で、大学に入ってからもっとも大切な資質や能力をひどく破壊してしまっている。そうでないと大学に入れない。しかもそのことにたいして、大学は大きい責任をもっているのに、この悲劇を大学人が対岸の火災のように見ている。<sup>27)</sup>』林の辛らつな言にはわれわれも耳を貸さねばならない点が多い。まず、社会と共存せねばならない大学は独自性をもつことが重要であり、その一つに教育改革を挙げたい。さらに、大学に入学するために知識の詰め込みの程度をみるように行われる入学試験に合格した大学生には、自らが学ぶ意欲や教員が学生の能力を引き出す教育をすることが求められると筆者は考える。社会に出る際に知識は知識として重んじられるわけであるから、教育にはもちろん知識の伝授が必要なことはいうまでもない。

## 9 学校が生きてる ニューヨークの現場から<sup>28)</sup>

著者船戸牧子はアメリカの高校で十七年間教えており、その体験や見聞が、日本の教育改革に実践のヒントになるかもしれないという思いで本書が執筆された。三章では実験校ジョン・デューイ高校が取り上げられ、ニューヨークを中心としたアメリカの教育は、日本の教育あるいはその改革に示唆を与えるものが多い。

六章社会と係わる教育ではアカデミー・オブ・ファイナンス 企業の要請で生まれるについて興味ある記述がある。『企業にとってピ



ビジネスの基本を身につけた即戦力となる学生は、喉から手が出るほど欲しい。そういう学生を育てるために、企業が積極的に教育に係わることもある。デューイ校の誇るプログラムの一つアカデミー・オブ・ファイナンス略してAOFは、その好例である。一九八二年、ジョン・デューイ高校で始まったAOFは、金融サービス業界が急速に拡大し、それに見合う人材の不足が予想された一九八〇年の初めに、当時シアソン・アメリカン・エクスプレスの社長だったサンフォード・ウェイル氏の発案により、企業がスポンサーとなって、財政業務に関する知識と実地訓練を施すプログラムを高校に作り、実戦に役立つ高校生を金融業界に送り込もうという意図から生まれた。・・・このような世間の思惑に十年以上も先んじて、ウェイル社長は、企業が率先して教育に係わり、学校と協力して、若い人たちに人生の可能性を知らせたい、アルバイトで知ったマクドナルドの床掃除ばかりが人生ではないことを知らせ、意欲を持って金融業界に入ってくる若い世代を育てたい、と考えた。・・・AOFの目玉商品といえる夏季実習（インターンシップ）は、夏休みに六週間から八週間、AOFの生徒がAOFの趣旨に協力する会社で、実習生（インターン）として実務をとり、給料をもらうという実地訓練である。AOFの実習生を受け入れる会社は、先述の企業のほかにもフェデラル・リザーブ・バンク・オブ・ニューヨーク、ブルーデンシャル証券、アメリカン・ストック・エクスチェンジなど三十社に及ぶ。<sup>29)</sup>』わが国でも高校や大学でインターンシップ制度はあるものの、企業が積極的に教育に係わる度合いはまだまだ低いように思う。ただ、インターンシップを実地した企業に就職する学生が増えてきている点は自分自身にあった職業を選択している結果と私は受け止めている。

著者は『終章教育改革に思うにおいて、一学力を下げないで、二学際教育のすすめ、三

地域社会を知る、四学校と社会と家庭と、五教育とは善意の押しつけについて提言している。学際クラスのテーマにこと欠かないのは、社会科と国語である。歴史、文化、地理、産業、環境問題などの社会科と地域社会の特殊性とを結びつければ、学際教育のテーマなどいくらでもできる。また今問題となっている環境汚染を化学や生物学、さらに医学などとも関連づけて考えるクラスがあっても面白い。園芸やアート、音楽、写真などの形を取って表現できる分野もあるであろう。<sup>30)</sup>』

## 10 開かれた大学授業をめざして—京都大学公開実験授業の一年間<sup>31)</sup>

京都大学総長井村裕夫によるはじめに—大学教育と公開実験授業を引用して、本書の概要をまず説明しよう。本書は、公開実験授業「ライフサイクルと教育」（田中毎実教授担当/平成八年度京都大学全学共通科目）に関する共同研究の報告である。・・・この授業のほぼすべて（通年二〇回のうち導入一回を除く一九回）は、京都大学の教職員ならびに関心をもつ学外の人々に公開された。本書で詳しく述べられているように、授業の実施と観察に引き続いて、毎回、授業者と観察者たちが、授業案などの配布資料、ビデオ映像、観察記録などを用いて授業検討会を行った。・・・京都大学高等教育教授システム開発センターは、教授法と評価の二部門からなる設立まもない小さい組織である。『・・・大学設置基準の大綱化以降、大学のカリキュラム編成、教育の到達目標、シラバス、相互授業参観、学生の授業評価、FDないしSD、自己評価など、さまざまな議論が沸騰している。議論の背景には、時代の大きな流れがある。一方で、急速な科学技術革新のもとで国際化し情報化し高齢化する社会からは、大学の教育へいくぶん高すぎる期待がかけられている。他方で、豊かな消費社会で育ち欲求の淡い学生たちの多くは、激烈な進学競争をへて入学したあとでは、学

習意欲をすっかり低下させている。高い教育要求と低い学習意欲との大きな落差を前にして、私たちはむつかしい教育問題に直面する。しかも高等教育は、青少年人口の激減という「冬の時代」を迎えつつある。経営維持のためには進学率の伸びを図らなければならないが、これがより一層無気力な入学者を増大させる。・・・教育への高い期待に、大学は十分に応えていない。たとえば一般教育をみてみよう。私たちの世界は、単純な文字文化の社会から複雑で高度な情報社会へ急速に移行しており、しかもここでは人間の知力への素朴で力強い啓蒙主義的な信仰がひどくそなわれている。古典的な教養主義の成立基盤は大きく崩れているのだが、かといって一般教育が存在意義を失ったわけではない。むしろ、巨大な社会文化変動と地球環境の危機に直面する今日においてこそ、社会や文化の構成主体である人間存在への信頼を新たに再建し、地球共生系への理解を深める一般教育が、強くしかも切実に求められる。一般教育を解体する諸力の強い影響下で、一般教育が求められるのである。・・・かりに授業改善が試みられるにしても、それはもっぱら孤立した教師たちの個人的な善意や創意工夫にまかされていたのである。公開実験講座は、この閉鎖性を開こうとする努力である。<sup>32)</sup>』ここで井村裕夫は大学教育改革等が抱える問題を適確に述べており、山口大学でも同様な教育改革がなされてきたことは言を待たない。

ところで、注目したい公開授業については第1章から抜粋して見よう『この授業は全学共通科目（おおざっぱに言えば従来の教養科目に該当する）に属しているが、京都大学のこの科目では、「高度一般教育」がめざされている。・・・公開授業では、個性化された大学教育の一つの類型をつくりだすことをめざした。公開授業の途中で数回、「それはあなたの大学だからやれるのでしょうか」という、評価とも非難ともつかない言葉を聞いた。私がめ

ざしたのは、まさにそのような授業である。さまざまな大学での個々の教育実践をとりまく条件は、それぞれの教員のそれぞれの状況で徹底的に異なっている。当然のことである。このようにして互いに異なる場にある教員どうしが教育について語りあう場合には、無理やりに共通条件を仮構したりはせず、むしろ各人が自分に固有な条件を十分に生かしたユニークな実践にもとづいて話し合っ、はじめて互いに分かりあえるであろう。・・・この授業には、学生や同僚やマスコミから実に多種多様な評価が与えられた。・・・常連以外の折々の参加者もいくぶん遠慮がちであり、どちらかといえば迎合に傾きがちであった。・・・いずれにせよ、大学人が人間形成論を構築し講義することとはおそらく、この分析して理解することの難しい「居心地の悪さ」をあえて自分自身のこととして引き受けることである。これが公開実験講座を終えてえられた実感の一つである。そしておそらくはこの実感こそが、この授業からえられた人間形成論そのものへの最大の貢献である。人間形成論の授業は、人間形成論にとって絶好のしかも生産的なフィールドワークなのである。注織田揮準「学生からのフィードバック情報を取り入れた授業実践」(『放送教育開発センター研究報告』八三号所収)(田中毎実)<sup>33)</sup>』わたしの想像に反して、公開授業への参加者は少なく、この原因の一つに『大学教員が自分の役割をどのようにみなしているかにもかかってくる。大学教員の大半は、日常的に学生や院生などの教育にたずさわっている。にもかかわらず、彼らは多くの場合、自分たちの所属機関がどのていど研究大学的な色彩をもっているかはほとんど無関係に、自分たちを「教育者」ではなく「研究者」と見なしがちである。我が国の中でも大学教育への社会的関心はかなり強まっているが、大学の内部では、深刻な教育問題に日常的に直面している一部の学校を除いて、教育への問題意

識の盛り上がりは今一つである。それは、「自分は教育者である前に研究者だ」という、教員の自己規定の偏りにも起因しているのである。わけても京都大学には強い研究大学的色彩があり、しかもそれが「自由の学風」という大学自身の伝統的自己規定によって、大きく増幅されている。<sup>34)</sup>数年前に山口大学は研究大学あるいは教育大学としての使命を全うするかという議論があったが、その後どういふ議論がなされ、どういふ展望なのかが見えない。

## 11 教育の挑戦<sup>35)</sup>

玉川大学総長小原芳明の著書であるが、まえがきで『今まで学校は変化に対して受動的だったが、これからの教育の挑戦は社会や時代の変化に能動的になることである。<sup>36)</sup>』

本書の構成はⅠ教育の挑戦＊対談河村建夫×小原芳明、Ⅱ学園日誌＊対談黒田玲子×小原芳明、Ⅲ学長・学園長訓辞＊対談広中平祐×小原芳明となっている。

二一世紀に相応しい教育—「創立記念日・全学教職員の集い」理事長挨拶（二〇〇四年四月一日）において大学評価について次のように話している。『・・・特に、学部へのマイナス評価は、大学としてのランキングにとって大きな痛手となると考えておくほうが安全策です。また、このところ嘆かれているのは、学力低下だけではなくありません。体力も低下してきていますし、それ以上に問題なことは倫理観なき学生が増加してきているということです。・・・大学生の学力低下が問題になってきていますが、高校三年生の意識調査結果が新聞に報道されました。それによると、勉強の必要性を感じながらも、行動が伴わないという高校生が増えてきているとのことです。・・・この調査で明らかになったことに、高校生の意欲低下があります。学力の低下は理数系に著しく、大学にとっては「絶望的」レベルと言われるものです。マスコミは、「教

育行政に反省を迫る」調の記事で、行政サイドを攻め立てていますが、問題にすべきは、勉強しない高校生と、そして勉強させない高等学校です。・・・高等学校での就学目標も弱かったのですから、大学での勉強目標なり意欲も創像できるレベルでしょう。基礎学力にしても、一二年間で達成し習得できなかったものですから、大学四年間での勉強に必要な基礎・基本を期待することは奇蹟を望むようなものです。そうした生徒たちに対して、補習授業を設定する大学もあります。・・・もう一つお願いしたいことは、大学における単位の定義に厳密に従った授業を行うことです。言うまでもなく、大学での一単位は教室内での一時間の活動に対して、二時間の教室外での学習を前提としています。学生たちが教室外での学習、つまり予習と復習を必ず行うようにさせてください。<sup>37)</sup>』筆者も小原芳明の言葉に同感であり、大学生が勉強に、日常生活に目標を掲げて欲しいと常々思っている。

対談広中平祐×小原芳明 大学教育にもとめられるものから有意義な話を紹介しておく。『視野を広げ、想像力を養うでは、（小原）玉川大学では今年の四月から、日本で初めてリベラルアーツの名を冠する「リベラルアーツ学科」をスタートさせます。文系・理系を問わず、広い領域の教養を学ぶことで、総合的な判断力や倫理観、想像力を養うというリベラルアーツの考え方にこそ、これからの大学教育の進むべき方向があると、私は確信しているんですが。（広中）それは、非常に望まれていることだと思いますよ。かつて日本の国立大学には教養部というのがありました。これは、リベラルアーツが念頭あって作られたのですが、明らかに問題点があった。・・・（小原）日本では専門主義が非常に強く、一方で、大学教育の弊害になっているように思います。（広中）その通りです。いったんは専門主義というのをぶち破らなきゃダメかもしれない。僕が山口大学で学長を努めたよきの経験

ですが、学生は早く専門をやりたいんですね。早く専門を取って、専門の技術で、いい就職でもできればという感覚が強すぎますね。だけどこれは、日本の社会的風潮もあるよね。子供の頃から、軌道に乗って早く行ったほうが万事得だというようなね。学力は多様化しているでは、(小原) 最近では、ものすごくできる人から、ちょっと困ったなという人まで、実に多様な学生が大学に入ってくるようになりました。学生の学力低下ということが近頃言われますが、あれは的を射てない表現だと私は思うんですが。(広中) 低下ではなく、学力の多様化ですね。学力や能力が多様化しているんだから、これからは多様な教育をせざるをえないわけです。モチベーションの必要性をよく言いますが、単に公式をたくさん知ってることよりも、知ろうとした動機を大切に教育。・・・卒業後を見据えた教育をでは、(広中)・・・僕は大学というのは、「はんせいひん」を作るところだと言っているんです。「はんせいひん」の「はん」は凡例の汎、「せい」は精力があるということで、「ひん」というのはやっぱり大学卒の品格のある奴だとね。・・・(小原) 毎年どんどん、新人は卒業してくるわけだから、自分に付加価値がないと居場所もなくなり、先も読めなくなりかねないと。(広中) 専門は、就職してから持ち場でやればいいですよ。大学というのはやっぱり、いろんなものを教育すべきです。本人だって、自分がどういう方向がいいのかわからないんだもの。むしろいろいろなものを勉強しておいて、ひょっとしたら、寄り道をしたところがほかで役に立つかもしれない。<sup>38)</sup>』

広中の言葉にあるように、大学では専門バカになるのではなく、広範な勉強をすることが大切だと思っている。

## 12 学力低下は錯覚である<sup>39)</sup>

著者神永正博は東北学院大学工学部電気情報工学科准教授であり、数学を教えている。本書の構成は次のようである。第1章大学生の学力低下の実態、第2章ゆとり教育は学力低下の原因か、第3章理工系離れを考える、第4章教育の今後を考える、第5章望ましい教育システムとは、である。

恐るべき学力の低下?について、少々長くなるが、引用しておこう。『日本で初めてフィールズ賞を受賞した天才数学者、小平邦彦氏のエッセイ集「ボクは数学ができなかったという」(日経サイエンス社、1987)には、こんなくだりがある。私が昭和五十年に学習院大学で教えるようになってから、年々数学科の学生の学力が低下していくことに気づいた。私ははじめ学力低下は数学教育の現代化のせいだと思っていたが、経済学の大内力さんが五十四年十一月五日の朝日新聞に書かれた「学問に未来はあるかー恐るべき学力の低下」と題するエッセイ集を読んで、学力低下は数学に限らず学問全般に及んでいることを知った。

学力低下論は根が深い。このころから「恐るべき学力の低下」といわれ続けているのである。<sup>40)</sup>』

『小中学生の国際的な学力検査(PISA, TIMSS)の結果は、異なる動きを示しており、現時点では、上がったとも下がったともいえない。したがって、日本人の若者集団全体をみた場合、学力低下の決定的証拠はないようだ。・・・一方、大学生の学力低下は、進学率が上昇し、以前は大学に進学できなかった層が大量に大学生となったことによって引き起こされている。1955年に大学に入った人は、同一年齢集団の中で、わずか7.9%に過ぎない。その40年後には大学進学率は30%を超えた。もはや、彼らを同じ大学生ということはできない。全く質の異なる集団なのである。すでに述べたように、集団「全体」の質の変化がな

くても、多くの人を大学生にしてしまえば、自然に「大学生集団」の学力水準は下がったように見える。本書では、特にレベルが下の方ではその差は想像以上に大きくなることを示した。「恐るべき学力の低下」の大部分は、おそらく統計的な錯覚である。<sup>96)</sup> 大胆な見解であるが、言われてみればそうかというように納得できる。われわれが質の良くない学生の学力レベルに合わせて教育することは、ひいては大学教育をゆるがし、日本の将来に負の遺産を残しつつあることに気付かねばならない。

第4章の教育の今後を考えるにおいては、荻谷剛彦は著書「階級化に日本と教育危機」(有信堂, 2001)で学力=やる気(インセンティブ)×知能と言っている。『韓国とフィンランドの教育システムについて次のように述べている。韓国の教育システムが短距離走の積み重ねであるのに対し、フィンランドのそれはマラソンに近い。いってみれば、短期的な目標でインセンティブを高める韓国方式と、着実に理解を深めながら長期的にインセンティブを持続するフィンランド方式ということになるであろう。<sup>42)</sup>』

結論として著者はこう結んでいる。『・・・現在の日本の教育システムでは、競争が緩和した上に、絶対に守るべき学力水準も不明瞭になっている。これでは、勉強に特別な興味があるわけではない普通の子供たちにやる気を出させるのは難しいのではないだろうか。<sup>43)</sup>』筆者は主に山口県内の小学校で防災授業を実施しているので、児童と会う機会が割合に多い。授業で熱心にメモを取り、質問をする児童は本当に勉強が好きの子供だと思う。このような児童が自然と増えていることを期待して止まない。

### 13 なぜ日本人は学ばなくなったのか<sup>44)</sup>

著者は言う。『日本ほど文明の進んだ国で、これほど内容の薄い教科書を使っていること

自体が異常です。ところが、それを大人たちが異常と感ぜないままに放置してきた。まずは、この点から改善する必要があります。

私はかねてから「もっと教科書を厚くすべきだ、文章のレベルを上げるべきだ」と言い続け、最近になってようやく会議が開かれるようになりました。以前は、教科書の内容を検討する会議すら、文科省の主宰ではなかったのです。

教科書のレベルを上げなければならない最大の理由は、格差の拡大を食い止めるためです。現在、公立小学校では、授業崩壊が深刻な問題になっています。おかげで、学校に期待しない親が増えています。

中学受験をする子どもは、小学四年生の時点から本格的な塾に行くのが当たり前になっています。彼らが通う塾のレベルはきわめて高く、高校受験を上回る場合も少なくありません。特に算数などは、一般の大人が見ても、おそらく手も足も出ないでしょう。

国語で読む文章も、高校入試に使われる文章と遜色ありません。つまり、そういう塾で勉強した小学生は、勉強しない中学生よりむしろ知識水準が高くなるわけです。この傾向は、すでにかなり一般的になっています。・・・おかげで、昭和時代に比べて教育内容がきわめて薄くなってしまいました。このことが格差を助長しているという認識がなければおかしい。<sup>45)</sup>』

筆者も小中学生の教科書には写真やイラストが多く、文章が少ないのに驚きをもっていました。適度の分量の文章が必要であり、それにより学習の基本となる小中学生の読解力が維持されるものと思う。

### 14 教育のエッセンス～日々の営みから教育の心得を学ぶ～<sup>46)</sup>

副題から明らかなように、教育問題は種々な面から議論されねばならない。第1章は教育の営みから学ぶ、第2章は日々の生活から

学ぶ、第3章は人生の歩みから学ぶである。今日の日本の教育が混迷し、未だに日本の子供達の将来像が描けないことについて、著者坪井守氏は次のように記述している。『その要因の一つとして、日本の「教育船団」の舵取りとなる組織が二つも存在することが挙げられます。

その二つの組織とは、安部晋三前総理大臣の肝入りで設置された教育再生会議と、これまでから学習指導要領の改訂に携わってきた中央教育審議会です。教育再生会議は、ゆとりのある充実した教育のあり方を明確に否定しています。

一方の中央教育審議会は、学力低下への批判を緩和するために、一度は削除した学習項目を復活させ、授業時数も増加する方向で学習指導要領の改訂をしています。

いずれにしても、現場主義の原点に戻り、日本の教育の明確な方向性を真に語る逸材間の議論なくして、戦後最初の学習指導要領にうたわれた精神を乗り越えることはできないと思います。<sup>47)</sup>』著者のこのような考え方で教育改革が刷新されるとは思えないが、会議や審議会はそれぞれの立場で教育改革を提言するのではなくて、一つの方針を出してくれることを筆者は期待する。

## 15 読む力・聞く力<sup>48)</sup>

本書のはじめにで河合隼雄は「読む 聴く」の大切さと題して次のように記述している。『「読む 聴く」というと、何らかの文章を読む、他人の話を聞く、というので、「話す」とか「書く」とかの行為に比して」受動的と思われる。しかし、視覚、聴覚という点から考えると、ぼんやりと何かを見ている、何か音が聞こえる、というよりは能動的で、そこに主体的な意志が関係していることがわかる。・・・

ところが、科学技術の急激な発展により、便利で快適な生活ができるようになったが、

どうしても効率的なことへの追求が強くなりすぎて、短時間で多くの情報をわかりやすく得る方法が進歩しすぎて、じっくりと「読む」とか他人の話を「聴く」とかのことがおろそかになる傾向が生じてきた。

テレビやビデオの普及によって、人々は瞬間的なエンターテインメントの方に心が奪われることが多くなり、いわゆる「活字離れ」の傾向が強まってきたのである。

このようなわけで、何とか気忙しい現代においても、じっくりと「読む 聴く」ことは非常に重要な意味を持っている。このような時代であるからこそ、余計に大切と言っていいだろう。

最近、急に盛んになってきた、小学校における「朝の十分間読書」の運動は、たとえ十分間でも落ち着いて読書することがどれほど大切かをよく示している。そして、この運動が日本中に広がっているのを大変素晴らしいことと思っている。大人も子どもに負けずに、会社でも「朝の十分間読書」をやればいいと思うほどである。<sup>49)</sup>』筆者もこの思いには賛同するし、「朝の十分間読書」は大学を含めた全ての学校ですればよいと言いたい。さらに、筆者の進めている『授業前の新聞読み<sup>50)</sup>』は勇気付けられる。

## 16 てらこや教育が日本を変える<sup>51)</sup>

「鎌倉てらこや」は、「日本の将来を荷う子どもと若者を積極的に育てていこう」という精神科医、森下一先生の提唱ではじまった。活動の母体は、早稲田大学の池田ゼミの学生・院生、地域の大学生たち、ボランティアおよび鎌倉青年会議所のメンバーなどである。

「鎌倉てらこや」は公的教育の教科中心主義のカリキュラムに対して、補完的な体験学習と感動体験を重んじる教育プログラムを組み、子どもと若者の心と魂を再生させることに努めており、この観点からも現在の大学をも含めた公的教育で欠如している点を補完してく

れるものと筆者は思う。

本書は第Ⅰ部なぜ鎌倉に「てらこや」を創ったのか一生野学園から鎌倉てらこやへー、第Ⅱ部親が育ち子が育つ そんな地域をつくる、第Ⅲ部子どもと若者の魂を輝かせるために、第Ⅳ部てらこや教育が日本を変える、第Ⅴ部「鎌倉てらこや」のすすめから構成されている。

第Ⅲ部子どもと若者の魂を輝かせるために第2章子どもたちの魂を輝かせるため箇所を引用しよう。『今、高校生の半分以上が、将来に希望が持てない、と言っていますね。でもこれは、もしかしたら子どもたちが健常だからかもしれないですね。親たちが、あるいは学校の先生たちが言って回った、高い偏差値とって、いいポジションとって、いい大学出て、いい会社に入ったといったようなことが、もう幻想だと気付いたからでしょう。』

じゃあ、これから子どもたちはどこに向かっていけばよいのか。三木清が言うように、真の幸せに向かって、子どもたちは学んでいくべきでありましょう。そのためには子どもたちは、良き人にならなきゃダメなんです。一人前の大人になるということです。柳田邦男という民俗学者に言わせれば、江戸時代、一人前の人間というのは、自分で考え、自分で判断し、自分で行動し、必要であれば、村や社会のために役に立てる人のことをいった。今この時代に、一人前の大人はどのくらいいるのでしょうか。<sup>52)</sup>』筆者は大学の講義を実施していて、この柳田邦男の言っているような学生が本当に寡少であることに気付かされている。大学生がもっと自分自身で考える教育方針が必要であると平素から実感している。

## 17 1 大学の教育・授業をどうする—FDのすすめ53)

本書は第一章変わる大学教育、第二章大学教員の試み、第三章大学教育改革の視点からなる。第二章六での私の授業改善の試みはわ

れわれの授業の参考になると思い、以下に引用する。著者は国際基督教大学の松岡信之教授で、専門は保健体育である。

『大学で学ぶことは一体何なのか、ほかの教科で学ぶことと体育で学ぶことはつながりなくはないのです。・・・大学で学ぶことは何なのかといったときに、さまざまな考え方があるかと思いますが個々教科が勝手に実施されるのではなく、常に大学教育全体の課題が念頭におかれなくてはなりません。そこで、今までの大学教育の方向を資料にまとめてみました。今まで大学が学生に教授しようとしてきたものは、人間の主観的な世界から独立した客観的世界に関する知識や情報、それが主だったのではないのでしょうか。正しいとされる知識を教員は学生に伝え、学生はそれを教員から教わるという形で授業は成立していたのかもしれませんが、しかし、このような知識はいまの私の現実を具体的に理解することには結びつきにくく、知識のための知識に終わってしまう危険があります。このように主観を排除した客観的な知識の体系を学習することに偏ってしまうと、学生は知識に対して批判する余地がなくなってしまう、それをひたすら覚えるしかなくなってしまうのではないのでしょうか。その結果、学生の受動的な学習態度を助長してしまう危険性があるのではないだろうかと思えます。<sup>54)</sup>』

このように著者は知識偏重の教育のあり方に警鐘を鳴らしており、筆者も同感である。ただ現状の授業時間の範囲ではどうしても学生に新しい知識を教授することに時間がとられるのは否めない。そこで、知識の詰め込みでない授業を学生に理解させるために、適度に考えさせる時間を与えることが筆者の憂慮すべき点の改善になると筆者は考える。このことは大学の授業<sup>55)</sup>と非常に密接に関連している。すなわち、教員と学生の双方向の授業が大切である。

## 18 2大学の教育・授業の変革と創造—教育から学習へ<sup>56)</sup>

上記の書籍の姉妹書である本章の構成は次のようである。第一章大学を変えよう、第二章私/私たちの教育実践、第三章授業改革・授業評価—個人の工夫から組織的取り組みへ。

第二章は大学教育における教員の役割に関するシンポジウムの内容を記している。工学部でも授業参観が義務付けられており、授業の方法は多々あれども、東洋大学文学部の蒲田誠親氏の教育観は参考になると思い、以下に引用する。氏は十数年にわたって時事通信社での海外特派員の経験を持ち、大学では国際交流センターの所長という役職を努められており、語学教育も担当されている。『私は授業に臨むに当たってのプリンシプルを自分に課して、それに従って振舞っております。第一点は、学生を大人として扱うことです。・・・学生を上から下に見おろすということは絶対にしてはいけなくて自分に誓っています。

第二点は、教室を一つのコミュニティとみなすことであります。教員という偉い人がいて、学生がそれに従って、時々はどなりつけられるというような状況は、そもそも起こしてはいけなくて、当初からそういうことが起きないように万全の手を尽くすということです。

第三点について、それは私の経歴にもかかわりますが、国際問題や国際関係を扱っておりますと、本当に何が正しくて、何を教えて覚えさせたらよいか、正直なところさっぱり分からないわけです。・・・ですから、私の頭の中には経験や知識が雑然といっぱい入っていますが、それらをおしえるというよりも、むしろ多様な問題を提起して、学生に考えてもらうモチベーションを与えることが第三点です。

それから、第四点ですが、国際比較をしますと、日本の学生はどうも子どもではないかと感じます。・・・ですから、自立の仕方を教

える、自立を促すということを私の授業目的の第四点に置いております。

次に、第五点であります。この非常に変化する世の中であって、何か固定したことを固定された形で頭の中にしまい込ませるということでは、将来学生が発展するときの障害になるのではないかとことを恐れます。ですから、いま勉強をしていることはしっかり勉強していただきたいのですが、将来、職業や専門の転換が起こったときに柔軟性を持って対処していけるような、そういう人間を育てなければいけないということを年頭に置いております。<sup>57)</sup>』このように蒲田誠親氏の授業観は明確であり、とりわけ第三点目の学生に考えさせる授業は大切であることを筆者も日頃から感じていることである。

## 19 大学の授業<sup>55)</sup>

本書は12章と結論から構成されており、大学の授業における基本的な項目について提言がなされている。第1章「大学生の言語能力」、第2章「学生はよんでいない」、第3章定刻と遅刻、第4章おじぎ・着席・受験票、第5章講義をやめよう、第6章「貴族の義務」、第7章レポートを課す、第8章レポートの評価と指導、第9章「課題図書」、第10章試験、第11章学生の感想、第12章〈授業〉に関わる大学運営。

講義の進め方で参考になる第5章講義をやめようから引用しよう。

『講義は、するべきでない。この場合、「講義」とは、ある程度以上の時間連続して、教師の方から何かを話して聞かせることである。右の「ある程度以上の時間」とは、私自身の場合、五分間を目安としている。五分以上も一方的に話しつづけてはいけなくて。理由は、次の三つである。

一、教師が話して聞かせることを理解するためには、学生は、すでにそれ以前に、必要な概念を持っていなければならない。・・・



二、学生は話の聞き方（理解のしかた）が分っていない。・・・

三、何かの情報を与えるのに、どうして〈講義〉という方法しか考えつかないのだろうか。・・・

一、に関連して、著者はときどき「〇〇という語を知っていますか。」「△△が・・・・・・したという事実を知っている人は手を挙げなさい。」などと言って、彼らの頭の中が現在どうなっているかを探らなければならない。<sup>58)</sup>』筆者もこの点に全く同感であり、前論文<sup>2)</sup>で教員と学生間の対話式教育の重要性について論じた。しかし、この講義形式に問題はないことはない。すなわち、教員が学生に問いかけても学生の返答がない場合が多い事実をわれわれは承知している。学生が積極的に講義に参加することを期すしかあるまい。

## 20 教育をめぐる虚構と真実<sup>59)</sup>

本書は6章からなる対論集である。各章とも3名が体論している。その中から、教育の考え方や教育法について関連のある箇所を引用しよう。第1章における斜めのコミュニケーションをめぐる教育では『神保—コミュニケーションということ藤原さんが強調されているのは、「斜めの関係」ということですね。「縦」でも「横」でもなく「斜め」なのは どうしてでしょうか。藤原—子どもたちはいま、親と子、先生と生徒という縦の関係に生きづまっているんですね。それでも横の関係が豊かだと何とかなるんですが、おたがいが傷つくのを怖れて友だち同士の関係もとても薄い。

でも、ちょっと考えて見れば、家を建てる時、縦の柱と横の梁だけでは地震に弱くて、すぐ倒れてしまうでしょう。「筋交い」といって、柱と柱の間に斜めに入れる補強材が必要なんです。人間関係でいうと、お兄さん、お姉さん、おじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃん、近所のおじさんや学校の先輩だっていい。・・・

現在そういう「斜めの関係」がことごとく潰れてしまった。家の中に兄弟がいないし、ふたり兄弟でも、両方がひとりっ子状態で育ってしまう。地域社会では、お兄さんお姉さん、おじさんお婆さんとの出会いがほとんどなくなった。父親や先生に否定されたら、もうどこにも行き場がなくなってしまいがちです。・・・

だから、「斜めの関係」と寛容さを、もう一度地域社会のなかにつくっていかないといけないんです。・・・僕は教育改革をするとき、「ゆとり」とか「学力」ではなくて、「地域社会のなかの斜めの関係の復興」を目標とすべきだったと思うんですよ。<sup>60)</sup>』今の大学生を見ていると、コミュニケーション能力の足りない者が多く、私が授業中に質問する意味がわからない学生がいることが現実である。藤原氏の指摘するように、斜めのコミュニケーション能力をぜひ復活させたいものだと思う。

次に第1章の過大な要求にあえぐ教員たちから教員の「生きる力」の箇所を引用しよう。『宮台・・・そこで僕は、解決に向かう唯一の方向性がモデル・ラーニングだと言ってきました。圧倒的な成功例を手本にして学ぶプロセスです。でも当時なかなか手本がなかった。その、藤原さんの「よのなか」科はまさに臨教審のいう「生きる力」の習得実践になっています。

でも、これだって手本にして学ぶのはむずかしい。「生きる力」を持つ教員がそこにいれば、生徒にも感染しますが、「生きる力」のない教員が「生きる力」を教えることはできない。「タフになれ」と教えたくとも、教員が「タフな人間」でなかったら、どうにもならない。

これは教員個人個人の問題じゃないんです。教育界が教育界のなかで閉ざされていれば、そこにいる教員に「生きる力」も「タフネス」も宿るはずがないんですよ。その意味で、これは教育界の風通しの悪さの問題であって、

左翼利権化にもつながることでしょうね。<sup>61)</sup>』山口大学工学部では、授業参観を行ったり、学生の授業評価を実施している。上述した教員の「生きる力」は「教える熱意」と捉えても差支えがないと思う。そのためには、授業参観や授業評価で「教える熱意」の評価の高い教員の授業をモデルにした授業を学びたいものだ。

## 21 知ることより考えること<sup>62)</sup>

本書は教育書ではなく、分かりやすい哲学書であるが、第4章の学力いらなで考えることの大切さを強調しており、引用しよう。『「ゆとり」と「詰め込み」の間で、子どもは本当は何を学ぶべきなのか。そういう本質的な事柄に関する議論は、相変わらず為されないままである。今さら言っても詮ないけれども、「学ぶ」とは、本当は、何を学ぶことなのか。「学力」と「思考力」とは、どう同じで、どう同じでないのか。

たとえば、最近私の文章もよくテストや問題集に採用されるのだが、そういった基本的なことが教える側に全くわかっていない。

学力とは、いかに自力で考えないかという技法に他ならない。自分で考えない人間が、賢い人間であるはずがない。しかし、教育とは、賢い人間に育てるということ以外の何であろうか。

私は時々思うのだが、もしも賢い人間になろうと思うなら、あるいは賢い人間に育てようと思うなら、人間には学力などない方がよいのではないか。いや極論すれば、字など読めない方がよいのではないか。<sup>63)</sup>』池田はあることを知った場合、思考は知識と呼んでいる。ゼロから自分で考えて知ることが思考という。この観点からすれば、初等教育から自分で考える力をつけておかねばならないし、教育もその方向で実施されれば大学教育でも自分で考える能力のある学生への教育はやりがいのあるものになるであろう。

## むすび

20冊の教育に関する書籍から以下のような知見を得た。教育はもちろん教員と学生間で成立するもので、両者は車の両輪であり、両者がうまく作動して立派な教育となる。

そのためには大学教員が積極的に知的能力を形成し、学生の知的能力を引き出すことが大切であり、さらに大学教育は職業能力をも学生に植え付けることも重要である。学生が何を学んだかを授業評価などで明らかにして、学生に学ぶ意欲を持たせ、また質問、議論、コミュニケーションの大切さを教えねばならない。現在、工学部で実施されている学生の授業に対する感想形式から学生が読む力・聴く力をおろそかにしないような授業評価に改変すべきであろう。科学技術の急激な発展により、効率的なことへの関心が助長し、じつくりと「読む」ことや他人の話を「聴く」ことがおろそかになってきている傾向が生じていることは否めない。

さらに、質のよくない学生の学力レベルに合わせて教育することは、ひいては大学教育を崩壊させ、日本に負の遺産を蓄積しつつあることを教員は自覚すべきである。そのためには、今以上に初・中・高等教育が一層充実したものにならねばならない。そのためには学生は知識に対する批判精神を持ち、受動的な学習態度から脱皮することが現行のわが国の教育で希求されている。

教員の自己形成にとり、極めて重要なことは、所属する職場が教育と研究の場であり、大学と小・中・高校学校、さらに地域社会が一体となり、細分化された教育の質を高めることに留意せねばならない。

以上に述べた教育に関する知見から筆者は教育論として以下のように提唱したい。授業は教員と学生間の双方向でなされるべきであり、そのためには一般に行われているように、授業で教員は学生に知識・技術を教え込むだけでなく、学生に思考させる場あるいは時

間を持たせるようにせねばならない。

学生は今まで以上に授業の予習・復習に専念して幅広い観点から対象にする問題を理解する能力を身につけるべきである。さらに、日頃から教員と学生間の距離を縮めるため、学科内で教員と学生の懇談会等の場を設け、学生のコミュニケーション能力を高めてやるのが大切である。このことが達成できれば、学生が平素から積極的に教員の研究室に質問や議論のために来ることが可能になる。

(理工学研究科 教授)

【参考文献】

- 1) 山本哲朗：教育について学ぶ，山口大学 大学教育機構，No. 4，pp. 23～35，2007.
- 2) 山本哲朗：教育について学ぶ-その2-，山口大学 大学教育機構，No. 5，pp. 89～107，2008.
- 3) 文献1) p. 34.
- 4) 文献2) p. 106.
- 5) 天野郁夫編：教育への問い 現代教育学入門，東京大学出版会，2001（第5版）.
- 6) 同上：pp. 97～99
- 7) 同上：p. 118.
- 8) 金子元久：大学の教育力—何を教え，まなぶのか，ちくま新書，2007.
- 9) 同上：pp. 120～121.
- 10) 同上：pp. 123～125.
- 11) 山本哲朗：自宅で十分に復習の習慣を，朝日新聞「声」，2008年1月16日.
- 12) 文献8)中，pp. 129～130.
- 13) 三浦朱門：日本の教育は間違えたか，海竜社，2004.
- 14) 同上：pp. 227～231.
- 15) 新村洋史：大学生が変わる，新日本出版社，2006.
- 16) 同上：p. 252.
- 17) 同上：pp. 217～219.
- 18) 林 竹二：教えるということ，国土社，1997.
- 19) 同上：pp. 276～277.
- 20) 同上：pp. 179～180.
- 21) 市川太一：30年後を展望する中規模大学 マネジメント | が学習支援 | 連携，東信堂，pp. 213～214，2007.
- 22) 林 竹二：授業 人間について，国土社，2001.
- 23) 同上：pp. i～iii.
- 24) 同上：p. 169.
- 25) 林 竹二：学ぶということ，国土社，1997.
- 26) 同上：pp. 48～52.
- 27) 同上：pp. 95～96.
- 28) 船戸牧子：学校が生きてる ニューヨークの現場から，東京図書出版会，2006.
- 29) 同上：pp. 213～215.
- 30) 同上：pp. 391～400.
- 31) 京都大学高等教育教授システム開発センター編著：開かれた大学授業をめざして—京都大学公開実験授業の1年間，玉川大学出版部，1997.
- 32) 同上：pp. 1～5.
- 33) 同上：pp. 15～21.
- 34) 同上：p. 170
- 35) 小原芳明：教育の挑戦，玉川大学出版会，2005.
- 36) 同上：p. 3.
- 37) 同上：pp. 44～51.
- 38) 同上：pp. 227～233.
- 39) 神永正博：学力低下は錯覚である，森北出版，2008.
- 40) 同上：pp. 51～52.
- 41) 同上：pp. 52～53.
- 42) 同上：pp. 122～123.
- 43) 同上：p. 123.
- 44) 齋藤 孝：なぜ日本人は学ばなくなったのか，講談社現代新書，2008.
- 45) 同上：pp. 68～71.
- 46) 坪井 守：教育のエッセンス～日々の営みから教育の心得を学ぶ～，牧歌社，2008.
- 47) 同上：p. 71.

- 48) 河合隼雄・立花隆・谷川俊太郎：読む力・聴く力，岩波書店，2006.
- 49) 同上：はじめに pp. 4～5.
- 50) 山本哲朗：講義前10分間，科学についての新聞記事を読ませる，山口大学工学教育，Vol. 2， pp. 12～15，2003.
- 51) てらこや教育が日本を変える 鎌倉・早稲田大学発地域教育再生プロジェクト「鎌倉てらこや」，成文堂，2008.
- 52) 同上：p. 171
- 53) 1大学の教育・授業をどうする－FDのすすめ，社団法人日本私立大学連盟研修企画委員会編集，1999.
- 54) 同上：p. 151.
- 55) 宇佐美寛：大学の授業，東信堂，1999.
- 56) 2大学の教育・授業の変革と創造－教育から学習へ，社団法人日本私立大学連盟研修企画委員会編集，1999.
- 57) 同上：pp. 56～57.
- 58) 同上：pp. 28～29.
- 59) 神保哲生・宮台真司・藤原和博・藤田英典・寺脇研・内藤朝雄・浪本勝年・鈴木寛：教育をめぐる虚構と真実，春秋社，2008.
- 60) 同上：pp. 46～47.
- 61) 同上：pp. 57～58.
- 62) 池田晶子：知ることより考えること，新潮社，2006.
- 63) 同上：p. 100～101.